

室町期歌会資料集成稿―積文と略解題―(七)

石澤一志・武井和人・日高愛子・山本啓介

【緒言】

本連載は、多くが未刊・未整理のまま残されてゐる室町期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図としてゐる。

小論では、興福寺国宝館蔵『習見聴診集』第六本（興七一・二六二）に収められる南都歌壇歌会資料五点の積文を掲げ、併せて略解題を付した。

①天文廿二年二月廿七日於東門院家一統

②天文廿二年二月廿七日当座歌会

③天文廿二年三月十七日為正三位家賢追善一統

④永祿元年三月十七日大乘院家御会

⑤〔年時未詳（永祿十年前）〕夢想一統

なほ、『習見聴診集』第六本には、歌会資料としてなほ一点、「永享四年二月十一日室町殿月次和歌」が存するが、それは、本誌・第七六輯に掲出したので、参看願ひたい。

積文作成にあたり、以下の方針に従つた。

(1) 漢字は原則として通行の字体に統一した。

(2) 丁移りを、「一・」一・」の如く示した。

(3) 上句と下句の間に、一字分空白を設けた。

④〔4〕永祿元年三月十七日大乘院家御会

（及び併せて書写されてゐる「詠十五首和歌（仍覚）」

⑤〔年時未詳（永祿十年前）〕夢想一統

底本、この二つの歌会においては、行頭に歌題を書す。印刷の都合上、歌題は和歌の前行に移し、二字下げとした。

小論の一部は、JSPS科研費一七K〇二四〇七の助成を受けたものである。

底本としての使用を許可された興福寺教学部に、あつくお礼申し上げます。

（武井和人）

1 天文廿二年二月廿七日於東門院家一統

〔興福寺国宝館蔵『習見聴諺集』第六本（興七一・二六二）〕

天文廿二年癸二月廿七日於東門院家一統興行之

短歌方写之

初春霞

覚蒼

あさまたきたてる霞はきえかての ゆきのうちにも春をしれとや

梅薫風

岩松

いつくとか立えもかすむ梅花 色香もかせの情ならずや

春月

空実

いつるよりなかむるに猶ふくるまで かすむもあかぬ月の影かな

初花

光尊

かきりあれば花の下ひも今朝ははや 心も春にとけてみゆらむ

松間花

実暁

陰ふかみをのつからなる松の垣 かせてふ風を花に隔てゝ」一三

盛花

訓憲

ゆくゑなく心そまよふたかまやま 花より花につゝくしら雲

惜花

公寛

桜花移ふ色のなかりせは 春の行末もおしまさらまし

庭落花

俊尊

風ふれてつもれる花の色香こそ しみてみるへき庭の木本

言始恋

盛芸

露はかりかゝる情といひそめむ 身をはつかしのもりの下草

忍恋

俊盛

しのふともいはぬおもひのくるしきに なにと涙のむねにせくらむ

見恋

師清

おも影はほのみしま江による波を あたにもかくる袖のうへかな

折会恋

藤高

住吉やいのるしるしのふかき江に かゝりそめけるゆふくれの浪

契恋

登辰

いかならむちきるもあやな言葉の 行多をしらぬ人の心は

稀恋

縁実

稀にしも逢すはたえね玉の緒の かゝるや露の言葉のすゑ

恨恋

永兼

おほかたにうらむとはかりおもふらん ことにふれたる袖のなみたを

暁雲

光寛

八重たつも一すち残る横雲の なかはかくせる月は晨明」一四

海眺望

賢広

興津浪かせも長閑に浦との 霞の海にうかふつり舟

懐旧

正云

浅茅生のむかしをとへはありし世を かたるはかりの松のこゑかな

山家夢

実政

風すさむ深山かくれの柴の戸に むすひもあへぬ夢路なりけり

社頭祝

覚慶

みつかきやしらゆふかゝる松の葉の 塵うせぬ代よ猶ゆたかなれ

天文廿二年二月廿七日

（以下空白）

（武井和人）

〔2〕天文廿二年二月廿七日当座歌会

〔興福寺国宝館蔵『習見聴診集』第六本（興七一・二六二）〕

同日当座

山花

空実

わけいりてそれとこそみれ白雲の
かゝれる山は今朝のはつ華

華露

岩松

しつかなる軒はの花に朝露の
えたもとをゝにをきそまとへる

尋花

訓憲

心あての花のよそめはそれならて
又こそたとれ三輪の山陰

霞花

永兼

にほはずは花とやは見む遠方の
かすむ木すゑをさそふ春風

朝華

俊盛

明そむるこすのと山のしら雲の
花に匂へる庭の春風」一五

夕花

光寛

花の雲いさよふ嶺の夕附日
うつろひそむる春風そふく

軒花

実政

よそにのみ見しよりも猶一しほの
軒はの花にたちそうかるゝ

庭花

正云

下とくる雪かこそみる岩かきの
花よりつたふ庭のやり水

翫花

俊尊

春毎の花のほひやまさるらむ
うへそふからにかけの木ふかき

曙花

実暁

つらからむのちをはしらすあけほのゝ
露にかつちる花そめかれぬ

折花 登辰

こゝろなき名にやたつらん折かさす
花にうき身をわすれはつとも

見花 盛芸

見ても又みても名こりのいかならん
色香たへなる花の面影

遠華 賢広

あけほのゝ雲も霞も一しほに
花の色そふ遠方の山

河花 公寛

なかくるその水上のいかならん
かせにかたよる花の白浪

思花 師清

朝な夕なこゝろをつくす思ひねの
まくらの夢も花をこそ見れ

里華 光尊

さく花のほひをさそふ朝かせに
しられぬ里も春とこそなれ」一六

天文廿二年二月廿七日当座

天文廿二 誤卯月七日 頓写之文字 賦等為後学大綱

如正文写之者也無覺束書様在之以朱注之了

（武井和人）

③天文廿二年三月十七日為正三位家賢追善一統

〔興福寺国宝館蔵『習見聽諺集』第六本（興七一・二六二）〕

同躰三月十七日為正三位家賢追善一統

御興行從喜多院後跡正被贈之彼家賢卿

越世渡聖之夢見一首夢想在之其歌云

春雨におくの藤なみあらはれて

たのしみおほくおもふいへかた

此哥を頭に置いて卅一首

雨中藤

覚蒼

はるさめにぬれつゝかさす藤波の袖にもかゝる露の夕暮

暮春藤

岩松

るりの水移ふ月に春暮て藤浪かゝる池の松かえ

躑躅

空宝一七

さきつゝく遠山もとの岩つゝしゆふ日のかけの紅の色

歎冬

光尊

めかれせぬ花はさかりに岩ねよりいろもこほれてさける山吹

董草

実暁

にほひたつ霞のうちのすみれ草花にめてつゝ日数をそつむ

残春

訓憲

おしみても根にかへる花の形見には霞はかりそしはしのこれる

惜春

公寛

くり返し歎てもいさ行春を曳とゝむへきためしやはある

山泉

盛芸

法のこゑたえぬ深山のしたゝりや つもりてつきぬ泉なるらん

樹陰 俊尊

ふる雨の露もみたれてしけりあふ庭もこふかき青柳のかけ

納涼 清胤

千尋ともはからぬ滝の水落てふかき山路に夏そわするゝ

思野花 俊盛

名残なく野への薄は散ぬれとおもふ心をわすれやはせむ

里月 尊貞

見しやたれ露もまたひぬ袖のうへにありしなからのさとの月かけ

月前蜚 登辰

浅茅生の露をよすかにきり／＼すよな／＼月の影になくこゑ一八

古郷虫 永兼

らむ菊の花のみたれになく虫は露古郷の余波なりけり

秋夕 縁実

はれ曇空や時雨にならの葉の名におふ秋の夕くれの色

籬菊 経栄

れいならすまかきの菊のさきやらて霜にあやなくしほれはてぬる

曉霧 祐金

てらせなをしはしは霧にまよふともいて行人にありあけの月

時雨 師清

たつ雲のゆくゑの空もさためなき世のありさまをふる時雨かな

庭雪 時良

のこりなく梢もしろく雪の夜の明れははるゝ庭のしつけさ

枯野 家種

しのひても色はのこらぬ冬枯に 野辺のくさはのおもかけもなし
人界 祐根

身にかきうるうへになけれと人の世は はかなきものと思ひおとろく

空観 光寛

大かたは立まよひてし雲もなく むなしき空に月やゆくらむ

花巖経 実政

ほのめかす山の高ねのあさあけに 八重たつ雲のうつる日の影

菩薩 覺乘

くまもなく月の光やてらすらん 世をあはれみのふかきちかひに」一九

法唯心 賢広

おくふかくまことの法をもとむれば たゝ何事も心にそある

無常 実僊

物ことにかきりはあれとたくひさへ なきはさためぬ命なりけり

述懐 光順

ふくるまでねられぬまゝにつく／＼と おもふもかなし数ならぬ身を

夕懐旧 芳洙

いにしへをしのふかひなき浅茅生に さひしさはかりのこる夕暮

夜懐旧 樹閑

へたてこし世にはかへらぬ身とするも 夢そしはしの空たのめなる

身如夢 正云

鐘のこゑすむあかつきのねさめにも あたし此身はたゝ夢のうち

松風夢 覺慶

尋来てきくもあやなし夢の世と なりぬる跡の松風のこゑ

天文廿二年三月廿日家賢為追善

〔4〕永禄元年三月十七日大乘院家御会 ※「詠十五首和歌（仍覚）」付載

〔興福寺国宝館蔵『習見聴諺集』第六本（興七―二六二）〕

一 大乘院家御会

待花

花さかは色なましへそ朝かすみ けふあすとまつかひのしら雲 仍覚

尋花

咲ころをわすれぬ花をたのみにて たつねくらせる春の山なみ 尋憲

花未遍

春かすみたなひく山は花の香を たえ／＼ふくもあかぬあさ風 公陸

朝見花

朝霞たつとはかりにいつる日の ひかりそへたる花の色哉 清種

遠村花

行方もはるかに見えて一村の 花よりしらむしのゝめの空 祐根

故郷花

きて見つゝ花にそおもふ古郷の ならの都も春にそありける 元信

田家花

しつのおも心ありとや小山田の 返すいとなく花をみるらむ 光尊

古寺花

さきうつむ軒はの花の白妙に あくる詠めや雪のふるてら 孝誉

花似雪

夜るの雨をのこせる露に枝たれて 花のさかりはつもるしら雪 仍覚

河辺花

花さけは波も嵐も音たえて 春の川辺や猶かすむらん 実康

深山花

桜かりふるき山ちにわけ暮て こけを枕の花のしたふし 梅千世丸

暮山花

山深み花こそ光暮ぬとも よしやいそかしかへるさの道 氏政

古溪花

むもれ木の人にしられぬ花もなを さくかたととる溪のふる道 師清

関路花

あふ坂の杉のした道すきやらて 花にしはしはなをそやすらふ 光実

羈中花

越やらて山路の花にくらさはや ふもとの里をそことしらねは 時良

湖上花

見るまゝに奥からさきて春もいま 花のなみより志賀の浦かせ 光尊

橋下花

水にかけうつろふ花の波を越 こすゑをわたる谷の懸橋 泰諄

花下送日

めかれせすくるとあくとをこの春の 花の色香にまかせたらなん 親氏

庭上落花

庭の面にうへしもくやし植さらは あらしのさそふ花を見ましや 正家

暮春惜花

年／＼の春は有とも花鳥の 色をも香をもおしまさらめや 覚祐

社頭松

三笠山日かけもさすや松か枝に こもるあらしも万世のこゑ 親氏

古寺鐘

おほろにて影さしのほる日の東 名におふ寺のかねそかすめる 仍覚

山家水

世をはたゝいとふはかりの身にしあれば たえ／＼水のすめる山里 長成 二七

田家鳥

うちなひきみしねもるなる時もきて かと田にしけし秋のいろとり 祐岩

寄天祝

あふき見よ月日そためしおさめしる むかしをけふの天のかゝみに 尋円

永祿元年三月十七日

(一行分空白)

詠十五首和歌

仍覚

早春梅

冬のうちもおもひの外のたち枝あれば 去年とやいはむ梅のはつ花

湖上霞

しほやかぬ海も塩やくおもかけに たつるけふりは春かすみかな

暮春花

おしとおもふ春の日かすもとまらねは あたくらへして花も散るらん

郭公何方

きゝなれはまかへしかたをほとゝきす はつねにつけてまよふうき雲

行路夏草

道はいまあをきをふまぬ獣の あと見るはかりしけるむら草

夕卯花

卯花は岡辺の松の夕附日 いつともわかす雪のむらきえ

田家早秋

みちありとしつか門田にいりたちて そよくいなはや秋のはつかせ

月前懐旧

老か身はなにあるかひも有明の 月に恋しきいにしへの秋

里紅葉

一むらは山ちかければもみち葉も 里ひぬ色をそめて見すらん

暁時雨

むら時雨ねさめてきけは行かへる 雲にともなふ夢のかよひ路

竹間雪

雪をもみ台の竹のよすかて つこ ねたるすゝめの行かたやなき

河千鳥

風さむみさほの川霧たかための にしきもなみにたつ千鳥哉

庭松

うへをきていやつき／＼のやとしあらは 千とせを松のたねとしらなん

溪水

山水は谷せはくともすみはてね いてゝこゝろのにこる世中

遥聞鐘

朝な夕なおほろにきくや鐘の声 つとむる道は耳たゝすして

(一行分空白)

永祿元年秋卯月十六日頓写之畢上之大乘院家御会之短

尺者以正本写之十五首詠草者修南院以被写之本写之 二八

(日高愛子)

⑤〔年時未詳（永祿十年前）〕夢想一統

〔興福寺国宝館蔵『習見聴謄集』第六本（興七一・二六二）〕

一

夢想

君か代をいく千代かけて忘るなよなれしあつまの二世の契りを

此歌を上に置て一統卅一首興行之

立春山き

消あへぬ雪の山のは出る日の 光りとともに春や立らん

善提山之報恩院僧正

尊俊

野霞み

道しある世に立かへる春日野の おとろもかすみたなひきにけり

雪中鶯か

神かきも春はこえてやふる雪の しらゆふかけて鶯のなく

善提山之報恩院僧部

源俊

余寒月よ

夜な／＼の月にかそへん春もなし かけは氷をしける嵐に

東京院

孝誉

梅風を

をしなへて四方にやにほふ佐保のうち さく一はなの梅の春風

東北院

兼深

朝花い

いかにせん咲はうつろふ花にをく 朝露のまのならひなる世を

行勸房

俊尊

夕花く

雲かすみ奥よりおくの花やさく とはかりにほふ夕暮の空

近時

夜郭公ち

近くきく枕の上のほとゝきす 一声なきていつち過らん

経栄

浦五月雨よ

よそに見しうらわの浪に五月雨は ひとつによする里の中河 辰帝 祐金

納涼か

柏木の葉もりの神のしるしめや わきて涼しき陰となるらん 續藏院口 師清

※□、重書ニテ判読出来ズ。「主」歟。

早秋夕け

けふいくかたつともなきに秋風の 音も身にしむ夕暮の空 若宮神主 祐根

※作者名「根」字、「根」ト重書サル、ソノ右下ニ再度「根」ト書写

庭萩て

照せなをうへて見るてふ庭の面の 萩をはさらに夜な／＼の月 新 祐岩

聞虫わ

我なからなれもぬるまやかた糸の よるはすからに虫の鳴らん 祐範

暁鹿す

すそのより山入かへるさをしかの 露わけまよふ明かたのこゑ 古市之息 藤千代

峯月る

流転する三のさかひも峯たかみ 夜わたる月に雲かせのそら 等恵

湖上月な

なをてらせ見るにくまなきよこの海の 浪の上行秋の夜の月 古市 安房

暮秋紅葉よ

四方の木も下葉のこらす紅葉にて 暮し秋とはいまそしらるゝ 具春

浜千鳥な

浪風も吹上の浜のはま千鳥 たちさわきつゝねをのみそ鳴 春近

古寺雪れ

鈴の音雪の夜すから聞え来て みのりたえせぬ峯の古寺 藤鶴

※歌題「古」字、「木（敷）」字ニ「古」ト重書シ、ソノ右上ニ「古」ト再度書写

此歌者今度夢想を蒙りたる祐宜野田方人神也」三三二

依雪待人^し

しはしたにはるゝまもあれ待人の 道さへ山とつもるしら雪 藤政

寄貴恋^あ

浅からぬことの葉をのみ書こめし この一卷やかたみなりけむ 英春

寄絵恋^つ

つら／＼と思へはあたしうつし絵も 涙なくさむかたみならずや 重時

寄笛恋^ま

待となきもきくそかなしき笛竹の 夜こゑは遠きかたの通路 宗治

寄扇恋^の

残しをく閨の扇の匂さへ ふかきおもひの色となるらん 春音

寄注連恋^に

新枕おなし契をかけまくも いのるねかひや神もうけまし 春村

名所関^せ

関のとの杉のむら立あき霧に 木すゑかくれぬ相おいの山 宗経

名所里^の

のとなかる光そしるき春の日の なにほふ里のあけかたの空 春等

山家^ち

ちかく見えて行ははるけき山かけの 岩ふむ道の奥の柴の戸 守詞

眺望^き

聞かはなをわか住里のさひしさも まさりこそせめ山郭公 宗照

述懐^り

呂は律にこゑすみのほる浮田川 むかしに帰る宮人やこれ 利盛

寄神祇恋^と

をしなへてまもらさらめやく千世の^{代敷}神のつけせしおもふことの葉 光尊

以上永禄十年卯月四日写之写本湯願之筆候間不審非一者候

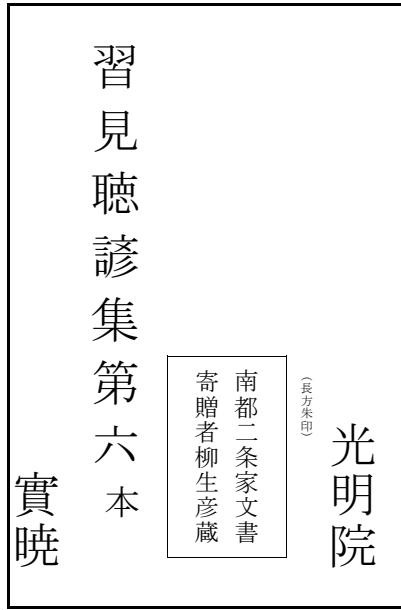
(以下略)」三四

(山本啓介)

9 【略解題】

小論で底本としたのは、興福寺国宝館蔵実暁自筆『習見聴諺集』第六本（興七一・二六二）である。該本の書誌について、拙著『中世古典籍学序説』（和泉書院、二〇〇九・八）で整理したが、補筆の上再掲する。

二条家文書の内。全一〇冊。大和綴。二六・五×一六・五cm。本文料紙はやや薄手の楮紙。後補表紙が各冊にかけられる。丁子引横縮刷毛目文様（近代のものか）。元表紙は以下の通り。



なほ、积文作成にあたり、興福寺本の忠実な転写本である尊経閣文庫蔵『実暁記』（二一・六・一三）を参看した。

1 天文廿二年二月廿七日於東門院家一統

本歌会に関しては、井上宗雄の論及が既に存する。

天文廿二年二月廿七日には東院（東院）で一統短尺の会があり、当座会も行われた。巻頭は覚誉の「初春霞（以下略）」空実・実暁・正云・覚慶らが加わった。覚慶は後の足利義昭、当座巻軸歌「尋来（尋来）てきく

もあやなし夢の世となりぬる跡の松風のこゑ多し。……*（題は「松風夢」）『中世歌壇史の研究 室町後期』四〇八（四〇九頁）

天文廿二年 一五五三 癸丑

二月27 興福寺東門院歌会 実暁記「初春霞」以下（以下は「初春霞」以下）

覚誉・岩松・空実・光尊・実暁・公寛・盛芸・俊尊・清胤・俊盛・縁実・経栄・祐金・師清・時良・家種・祐根・実政・覚乘・賢広・光順・樹閑・正云・覚慶ら短冊会廿四名、当座卅一名（東門院が正しい）『前掲書』七五八頁）

井上の後半の整理には、些かの疑念が存する。

まづ、短冊会（端作題に「一統」とあるので、続歌と題する方が正確である）と、続けて行はれたであらう当座会を併せて記述するのは良いとしても、一ヶ月後の3天文廿二年三月十七日為正三位家賢追善一統の作者まで併せて記してしまつてゐる点は、誤りといふ他ない。

また、作者名の記載にも問題とすべきものがある。

小論の积文が仮に正しいとすると、1天文廿二年二月廿七日於東門院家一統に出詠したのは、以下の人々である（以下記載順）。

覚誉（興福寺別当、一乗院）、岩松（未勘、『習見聴諺集』第六本・第三丁裏に「岩松丸」トアリ、同一人物歟）、空実（興福寺別当、喜多院）、光尊（興福寺別当、修南院）、実暁（興福寺別当、光明院）訓憲（未勘、但シ「訓」字存疑ナシトセズ）、公寛（未勘）、俊尊（行勤坊）5〔年時未詳〕夢想一統・注記ニヨル）、盛芸（北三藏院）5〔年時見聴諺集〕第三ニヨル）、俊盛（未勘）、師清（積藏院）5〔年時未詳〕夢想一統・注記ニヨル）、藤高（未勘、『習見聴諺集』第六本・第八丁裏ニ「龍田藤高」、第九丁表ニ「藤高龍田」トアリ、「龍

田」姓歟)、登辰(未勘)、縁実(未勘)、永兼(未勘)、光寛(法橋)〔『習見聴診集』第二・三ニヨル)、同・第六ニ「光寛巡泉法橋」トアリ、モト「巡泉」歟)、賢広(未勘)、正云(大東氏、紹巴ノ師歟)、実政(未勘)、『習見聴診集』第六本第一三丁表ニ「実政願信丸」トアリ)、覚慶(一乗院、後ノ足利義昭)。計二〇名。

2 天文廿二年二月廿七日当座歌会

1 天文廿二年二月廿七日於東門院家一統に続いて行はれたと覚しき当座歌会である。

前述の通り、井上『中世歌壇史の研究 室町後期』では、1 天文廿二年二月廿七日於東門院家一統に溶け込ませてしまつてゐるので、実態が見えなくなつてゐる。

小論の釈文が仮に正しいとすると、2 天文廿二年二月廿七日当座歌会に出詠したのは、以下の一六名である。

空実・岩松・訓憲・永兼・俊盛・光寛・実政・正云・俊尊・実暁・登辰・盛芸・賢広・公寛・師清・光尊

いづれも、1 天文廿二年二月廿七日於東門院家一統の出詠歌人。逆に、1 に見えてゐて、2 に見えない歌人は、

覚誉・俊尊・藤高・縁実・覚慶の五名。

末尾に、書写奥書と覚しき以下の文言が付される。

天文廿二癸卯月七日頓写之文字賦等為後学大綱

如正文写之者也無覚束書様在之以朱注之了

ただし、興福寺本に「朱注」は存しない。存疑。

3 天文廿二年三月十七日為正三位家賢追善一統

前書でいふ「正三位家賢」は、春日社神主大中臣家賢。正三位家統男〔『公卿補任』〕。その追善供養のために催行された夢想統歌である。家賢の事蹟を簡単に整理しておく、以下のやうになる。

文明一六年(一四八四) 生〔『公卿補任』より逆算〕

享祿三年(一五三〇) 一二月三〇日 従五位下〔『歴名土代』〕

※『歴名土代』は、湯川敏治編『歴名土代』(統群書類従完成会、一九九六・九)による。以下同様。

天文二年(一五三三) 九月六日 正五位下〔『同』〕

天文三年(一五三四) 正月六日 従四位下〔『同』〕

天文六年(一五三七) 二月八日 従四位上〔『同』〕

天文九年(一五四〇) 正月二十四日 正四位下〔『同』〕

天文一三年(一五四四) 三月九日 従三位非参議〔『公卿補任』〕

天文二〇年(一五五二) 三月 叙正三位〔『同』〕

天文二二年(一五五三) 正月一日 卒。七〇歳〔『同』〕。

井上『中世歌壇史の研究 室町後期』に、本歌会の記載は存しない。出詠歌人は、以下の三一名である。

覚誉・岩松・空宝・光尊・実暁・訓憲・公寛・盛芸・俊尊・清胤・俊盛・尊貞・登辰・永兼・縁実・経栄・祐金・師清・時良・家種・祐根・光寛・実政・覚乗・賢広・実僊・光順・芳沫・樹閑・正云・覚慶

4 永祿元年三月十七日大乘院家御会

末尾年紀により、永祿元年（一五五八）三月二日に行はれた、大乗院家の人々を中心とする歌会である。また、末尾識語より、短冊によるものであったことが分る。永祿六年に没する仍覚（三条西公条）の最晩年の詠歌活動を残すものとして、また、三条西家と大乗院家とのかかはりを示すものとして、貴重な事例といへよう。

出詠歌人は、以下の二二名である。

仍覚（三条西公条、三首）・尋憲・公陸・清種・祐根・元信・光尊

（二首）・孝誉・実康・梅千世丸・氏政・師清・光実（西南院、得

業・法眼（『習見聴診集』第一・三二ヨル）・時良・泰諄・親氏・

正家・覚祐・親氏・長政・祐岩・尋円

末尾に付載される「詠十五首和歌（仍覚）」は、類本を見出し得ない。

修南院（光尊）書写本の転写本。

⑤〔年時未詳（永祿十年前）〕夢想一統

識語より、永祿十年（一五六七）以前の成立であることが分る。

井上『中世歌壇史の研究 室町後期』に、本歌会の記載は存しない。

「此歌者今度夢想を蒙りたる祢宜 野田方人神也」なる注記が本文中にあり、この夢想歌（君か代をいく千代かけて忘るなよなれしあつまの二世の契りを）が、「祢宜」の蒙り得たものであるらしいことが分る。

直後の「野田方人神也」との間に、僅かではあるが空白が置かれてあることから見て、「野田方人神也」は、その直前の「祢宜」に対する注記と見るのが穏当歟。以上の推定が正しいとすると、この注記が付された歌（ちなみに初句「鈴の音」は、夢想歌によると、「レイノヲト」と読むべきである）をも詠んでゐる「藤鶴」が得た夢想歌によつて詠じられ

たのが、この冠字夢想統歌といふことになり、「藤鶴」は「祢宜」で、「野田方（の）人神」であつた、といふことになる（「人神」は未勘。乞教示）。

出詠歌人は、以下の三〇名である。

尊俊（菩提山報恩院僧正、二首？）・源俊（菩提山報恩院僧都）・

孝誉（東林院）・兼深（東北院）・俊尊（行勒房）・近時・経栄・

祐金（辰市）・師清（積藏院〔主？〕）・祐岩（新）・祐範（東

地井〔中臣〕？）・藤千代（古市息）・等恵・安房（古市）・具春

・春近・藤鶴・藤政・英春・重時（『習見聴診集』第六本第八丁裏

・第九丁表二「重時彌宜弥三郎」トアリ、マタ第八丁表二「号彈正重

時」トモアリ）・宗治・春音・春村・宗経・春等・守詞・宗照・利

盛（又六）・光尊（修南院僧正）

注記により、伝記資料が極めて少ない菩提山正曆寺報恩院の尊俊・源俊の事蹟が知られるのが、貴重である。

（武井和人）

「室町期歌会資料集成稿―積文と略解題―(七)」(『研究と資料』第七九輯、二〇一八・七)

《正誤表》

頁	段・行数	誤	正
P 20	上段 1行目	9 【略解題】	1 大乘院家御会 【略解題】
P 18	上段 3行目	1	